信州大学人文学部日本語教員養成課程2001年度日本語教育実習の概要

沖　裕子
（信州大学人文学部・助教授）

1. 2001年度日本語教育実習の概要

信州大学人文学部では、日本語教員養成副専攻課程を設け、修了証書を発行している。今期の受講生は、6名であった。当課程は、所定の科目の中に日本語教育実習（前期・2単位・4年次履修）を含むが、ここに、2001年度の実習記録を残したい。

今期の日本語教育実習の実施機関、内容、担当、期間の概略は以下の通りである。

① 信州大学人文学部科目担当教官による指導（沖裕子）　全期間

② 信州大学留学生センターにおける実習　6～7月

日本語・日本事情授業見学と指導（上條厚）

予備教育初級クラスの教壇補助と指導（合津美穂）

＜含プロジェクトワーク実践＞

予備教育中級クラスの教壇補助及教壇実習と指導（藤沢文人）

③ 韓国カトリック大学校における実習　10月

日本語スピーチ大会における審査員体験＜評価実習＞

ミニドラマ教授法見学と指導（津崎浩一）

教壇補助＜フリートーキング＞（中野敦）

教壇実習（津崎浩一・中野敦）

＜信大事情＞＜感謝表現としてのスミマセン＞

①②の活動及び、③の準備活動は、日本語教育実習科目の課題として行い、評価をした。③の活動は、任意参加である。前期2単位の科目としては、科目担当者にとっても履修生にとっても過重な負担となったことは否めない。しかし、履修生は意図するところをよく理解し積極的な取り組みをみせた。

充実した実習プログラムが展開できたのは、何よりも信州大学留学生センター、藤沢文人教授、上條厚助教授、合津美穂講師、また、韓国カトリック大学校、津崎浩一客員教授、中野敦客員教授の、無償の御協力のおかげである。記して心からの感謝を申し上げます。また、姜錫祐カトリック大学校言語文化学部長、内藤哲雄信州大学留学生センター長、大島征二信州大学人文学部長には、格別のご配慮を賜った。記して心よりの感謝を申し上げる。

2. 最終評価

科目としての最終評価は、レポートで行った。レポート課題を以下に記す。

レポート課題「１」については、「2001 年度日本語教育実習記録」、レポート「２」については、「信州大学留学生センターにおける日本語教育実習を受けて」と題して、本号中に別稿として掲げる。

また、留学生センター合津美穂氏には、実習受入れ日本語教員としての知見をおまとめいただいた論文を本号にご寄稿いただいた。記して謝意を表します。

レポート課題：以下の２点についてまとめよ。

１．今年度の実習で行ったことの記録を整理し、記述せよ。６人でよりよい記述の方法を討議しながら、ひとつのものを提出すること。第１回の講義から始まり、７月２４日に行われる留学生センターでのインタビュー発表会参加までのすべての行為（先生方との連絡や、事前の相談、プロジェクトワークとしてのインタビューを受ける等。さらに韓国関係も同様。）を含め、 また、記録・レポート作成に関する行為も実習過程に含める。それぞれの行為について、５Ｗ１Ｈを明らかにしながらまとめること。提出後にやり直しとなるような事態を招かないために、必要なら提出前に沖の指導を受ける。

２．(1)今年度の実習記録を作成する過程での討議や考察をふまえ、(2)指定した教科書（含『新しい日本語教育のために』）を読み返し、(3)必要なら他の文献にもあたり、(4)今回の実習での経験や観察を具体的に描写しながら(5)次の観点から各自の考察を深め、自由にまとめよ。実習での見聞から特に役立ったと思うことについては積極的にふれてまとめること。

①日本語教育の多様性とはどのようなものだと考えるか。

②自分自身が実行する立場にたった場合、多様性に対応するコースデザインをどのように行うか。

③コースデザインから始まり、実際に学習者とかかわりながらその実現にいたる責任者としての日本語教師は、どのようにあるべきか、各自の日本語教師像をまとめよ。言語・文化に関する知識、学習者心理に関する知識や運営組織に関する知識など、教室運営に必要な事項を考えるだけではなくたとえば、教室外での自然習得も含めて学習者の観点にたって考えるなど各自の日本語教育観を自由に掘り下げること。